

に居住す。故に世人山田屋小路と呼べり。然るに近き頃
にや轉宅して、此の小路の上なる方新堅町通り筋の家へ移
轉し、今に尙魚鳥の商賣をなしけりといへり。

○附木屋小路

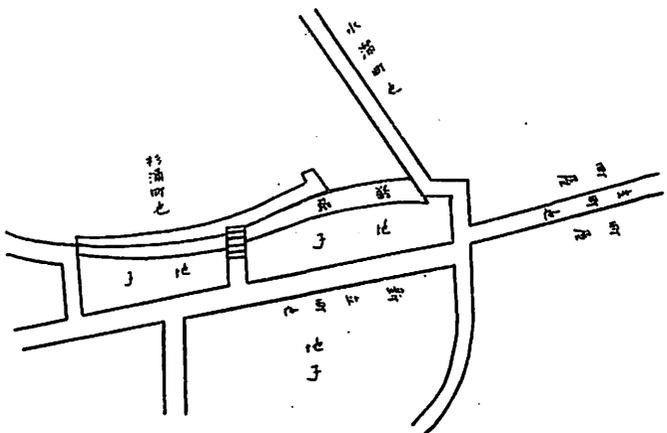
此の小路は、山田屋小路の上、百姓町への往來道なり。従
前は此の小路の角家に附木商賣する者居住し、昔より數代
相續せるがゆゑに、此の小路をば附木屋小路と呼べり。附
木といふは硫黄を付したる薄板にて、火を移す爲め従前は
毎戸必用のものなりしがゆゑに、誰彼買ひ來りしかど、今
は早附木陸んに成り、此の地なる附木商賣人も家を賣却し
て退去せり。

○水溜町

元祿三年金澤火災記に、鱒町・水溜町と並べ載せたり。同
九年の地子町肝煎裁許附に、水溜(は)ちり町とあり。昔は此の
地邊に水溜堀ありし故に町名とすといへり。

○水溜堀跡

延寶の金澤圖を見るに、今云ふ水溜町より新堅町の裏、杉
浦町の邊へかけ、數十間の間溜堀ありたるよし圖面に載せ



たることゝ掲げたる如し。是所謂水溜なるべし。元祿
六年の士帳に、堅町水車近所水溜、或は新堅町後、水溜など
と記載す。按ずるに、往昔此の地邊河原なりしを町地と成
したる節、深淵の埋め残りならんか。石浦神社に傳來せる、
慶長十一年石浦七ヶ村氏子連判の訴狀に、觀音堂のむかう
なるしめ野村は、田島過分の高之處、此近年河くづれにま
かり成、一村たえうせ申。と載せたるしめの村は、石浦七
ヶ村の中なる朱免野村也。此の村は、今の十三間町犀川橋
近邊に村落ありたるよし傳言すれば、右朱免野村の村地へ、
犀川のきれ込みける時などの川跡ならんか。此の地邊なる
河原を埋め町地となしたるは、寛永以前元和年中にやとい
へり。

○水溜御歩町

舊記には、新堅町御徒町ともあり。變異記に、元祿三年三
月十七日丑刻、金澤新堅町後、御徒町高橋儀兵衛より出火、
新堅町・油車・本堅町・河原町等焼失。とあり。武家混目集に
は、三月十六日夜新堅町御歩町高橋儀兵衛宅より出火、異風
烈敷、新堅町・本堅町・魚屋町・水車・本多房州下屋敷等延焼

す。とあり。油車御歩町と混するにより、水溜御歩町と呼
びたりと云ふ。此の地もそのかみ歩士の邸地なりしゆゑ
也。但し今は水溜町と呼べり。

○歩士由来

舊藩軍役の定たるや、藩侯の本陣附の諸士は、小姓組とて
本陣の旗本にあり。又馬廻の諸士は馬廻組とて、是も本陣
に居陣す。皆馬上にて出陣す。又歩士は歩立にて隊伍に連
りて争戦す。故に歩士とも歩行組ともいへり。輕卒は弓鐵
炮を以て奔走す。故に足輕と呼べりと。さて歩行は士列に
て、舊藩の歩士は六組あり。故に六組御歩と俗稱す。此の
次に定番御歩と云ふあり。定番御歩組ともいへり。是は城
代附にて藩侯の留守居附の歩士なり。故に昔は城番歩組と
書きたりともいへり。寛文十一年の士帳には、即ち城番馬
廻城番歩組など、載せたり。此の外算用者等の人々をば
歩士並となしたり。按ずるに、歩士は慶長十年の利長卿宮
山養老士帳に、歩衆とて百五十石細井彌左衛門以下、百石・
五十石・三十石の者三十二名、其の外中村彌五左衛門・宮崎
藏人・今井左太夫等三人の組歩衆といふも見たり。寛永